

ディスカッションによるリスク管理能力向上への取り組み

施設名：医療法人 明和会 たまき青空病院

発表者：桑内 奈々 (理学療法士)

共同演者：阿部 真伍 (理学療法士) 板橋 卓治 (理学療法士) 久木 悠生 (理学療法士)

川村 勇輝 (作業療法士) 山下 香奈 (言語聴覚士) 枋谷 充泰 (理学療法士)

【はじめに】

当院では急性期病院から転院された回復期患者や呼吸器・循環器・泌尿器等の慢性的な不全を認める患者を対象にリハビリテーション(以下、リハビリ)を行っている。特に近年においては、医療技術の進歩や国の施策による在院日数の短縮化から、対象者のQOL 向上を目的に積極的なリハビリ介入が求められている。臨床では運動制限等の指示を医師に仰ぎ、動作の段階に合わせて相談しながらリハビリ介入しているが、その際のリスク管理や動作介助方法は各自に委ねられている。そこで現状把握の為、リスク管理についてアンケートを行った。その結果、移乗動作時のリスクとして経験年数問わず転倒・転落が挙げられ、経験年数が5年目以下の職員は環境面への配慮が低く、介助位置や方法について不安を抱えており、また、多くの職員が急変時の対応に不安であることが分かった。今回、その結果を踏まえたディスカッションや伝達講習を行い、リスク管理の意識向上と技術の共有を図る取り組みを行ったので報告する。

【目的】

当院リハビリ職員22名(経験年数5年目以下(以下、5年目以下):8名、経験年数6年目以上(以下、6年目以上):14名)を対象に、リスク管理の意識向上とリハビリ部内でのリスク管理における知識、技術の共有を行う。

【方法】

ディスカッションでは、模型を用い、点滴やバルーンカテーテルなどのルート類管理が必要な患者を想定して、起居移乗動作について5年目以下と6年目以上が混在した5～6名のグループに分かれ介助方法やリスクを話し合い、各グループが発表を行った。また、急変時の対応やマニュアルの周知、インシデント報告の伝達講習もを行い、その後再度アンケートを実施した。

【結果】

ディスカッションでは、5年目以下は介助の位置や方法を意識していたが、6年目以上はルート類の管理、起居動作から移乗までの動線を考慮し、認知機能面等、個々の症状への配慮も提案することができていた。伝達講習では、急変時の対応方法を提示し、マニュアルの再確認を行うことで、リハビリ介入時の不安解消に繋がった。取り組み後のアンケートでは前向きな意見が多く、今後も定期的に開催して欲しいという意見も挙げられた。

【考察・課題】

少人数グループで全員が主体的に参加する場を設けたことで、5年目以下は気軽に相談ができ、6年目以上はそれに気づく良い機会となった。そして、多くの職員が不安を抱いていた急変時の対応や実際に発生したインシデントについての伝達講習も行うことで、マニュアル等書面だけの周知に比べ、実技を行う事で現実的に考えることができ、不安解消やリスク管理の意識向上に繋がったと考える。今後も様々なテーマについて、定期的にディスカッション等のグループワークを行い、職員間で意見交換することで、部内全体の不安解消やリスク管理能力向上、技術の共有に繋がると考えられる。